



三毛猫  
次郎の短い一日



ペルシャと別れた後の数ヵ月間も母上のことを町中隈なく捜したんじゃが、何ら手掛りは無かった。

ある日道端で知り合った同じく野良猫の良助に、夜の町は捜索したんかと聞かれ気付かされたんじゃ。確かにわしらは日中しか捜索しておらんと。

しかし良助が言うたことには夜の町はとても危険らしいんじゃ。

何でも「化け物」が出ると言っておった。良助も初め興味本意で夜の町へ行ったらしいんじゃが、それ以来というもの恐ろしくなってしまうて行っていないと言う。

じゃが捜索する価値は十分あった。

わしらはその日の夜、町の中心街の方へ行ってみることにしたんじゃよ。

日が沈み辺りの街灯がつき出した頃、わしと小次郎は出発したんじゃ。

良助の言う「化け物」とは一体何者なんじゃろうか。わしにとってはあの小学生姉妹の母上が一番の化け物に見えたがのう。それよりも恐ろしいんじゃろうか、気を付けねばならぬと思った。

それで、いつも日中来とる商店街に着いたんじゃが、全ての店は鉄製の嚴重なドアで、ピッチリと閉められておった。

しかも人間は一人もおらんのじゃ。

人間をもここまで恐れさせるとはなかなかの「化け物」じゃ思うて、男としては益々楽しくなってきたんじゃよ。

人っ子一人もおらぬ商店街の道を進んでおった。

するとカラン、コロン、カラン。



何じゃ、商店街通りの途中にある狭い小道から、いきなり空き缶が飛んで来おった。

人間が「化け物」に襲われとる、わしはそう確信して、小次郎に道の両端に広がる様に指示を出したんじゃ。

すると、わしらが小道の折れ曲がりには差し迫った時、人間のうなだれる声が聞こえて来おっての、緊張は最高潮に達しおったわ。

一、二、三、今じゃ。

わしらは一気に「化け物」へ攻撃を仕掛けることにしたんじゃ。

小道へ突入、すると前方からゾンビと化した人間のどこぞの父上様が迫って来おったんじゃ。何やら一人でブツブツ呟いておった。

正気では無いと、わしはすぐに察した。



そうして小次郎が攪乱しておる際に、わしは後ろの方に回り込んでお得意の猫パンチを浴びせてやったわ。するとこの父上様、こちらに振り向いたかと思った瞬間に倒れて動かなくなってしもうたんじゃ。

もはや「化け物」と化した父上様は最後に子供達にも会えず、さぞ無念だったことだろう。この父上様のことをわしらは心から悼んだものじゃった。

どんな時も、「戦いは不幸」でしかない。

じゃがその悲しみも束の間、まだ他にも「化け物」と化してしまった人間が歩き回っておったんじゃよ。

良助が言っておった恐ろしい光景はまさにこのことじゃろうかと思った。

日中わしらが目にする人間と違って奇声を上げたり、大声で笑ったり、泣いておる者までおったんじゃ。

じゃが、何だか楽しそうじゃった。

先程わしらが倒した父上様に同じ様な年代の父上様一行が近付いて行きおっての、しかもなぜだかみんな笑っておった。

すると倒したはずの父上様が頭を搔きながら、再び生き返って起き上ったんじゃよ。

しかもニコニコしておる。

ははあん、わしらは段々理解しおったわ。

つまりこれはその、いや、まだ混乱しておったわ。小次郎もこの光景を怪訝そうな顔をして観察しておった。

じゃが、これだけは確かじゃった。

あの母上様程の「化け物」はここにはおらんと。

いよいよ面白うなってきたの、ここには滑稽な人間御一行様が集まっておったんじゃよ。

すると良い香りがしてきてのう、良い香りのする家の方へ自然にわしも小次郎も釣られてしもうたんじゃ。初めて嗅ぐ香りじゃった。

その香りの元へ辿り着くと、家先には赤く光輝く物がぶら下げられておった。一体何だったのかいまだに分からんが、きっと人間にとっての目印の様な物だったんじゃろう。

不思議と父上様達が、スルスルと家の中へ吸い込まれて行くのじゃ。

さて、わしらがそれを見上げておったら父上ゾンビが家の奥の方から近付いて来た。その父上ゾンビは上機嫌と見えた。

身の危険は感じなかったからの、その場に伏せておると父上ゾンビは食べ物を持って来てくれたのじゃった。それも皿にてんこ盛り。食うたことのない豆やら肉やら得体の知れない物やらを持って来てくれたんじゃよ。



ゾンビは日中の人間に比べて随分と親切じゃった。

良助に騙されていたんじゃないかろうかのう。

その中で小次郎が気に入った物はこの、小麦をこねた物に何やらビヨーンと伸びる黄色い物と、具がたくさん積まれておる物じゃった。わしはそれを知っておった。ペルシャから確かそのような食べ物のことを「ピザ」と言うのを聞いておったんじゃない。

小次郎は兄上なかなか美味しいですぞと言いながらパクパク食っておった。



それはなと言いかけたんじゃないが、ペルシャが言っておった「ピザ」かどうか確信が無かったからの、分からんと続けたわ。

わしが特に気に入った物は三角・丸・四角が一本の串に突き刺さっておる物じゃ。どうじゃ、理解できたかのう。それが決まった形という訳ではないらしいがその印象がわしの中では強いんじゃない。

これは何と言うても口の中に入れた時にその様々な旨味がつまり、踊り出すんじゃないよ。そして食べ終わった後がまた良い。その食べ物が浸っておった汁が何とも美味しいのじゃ。わしはその汁のことを伝説の「黄金の汁」と命名しようと思うと。御主にも飲ませてやりたいのう。



この食べ物、今まで日中見かけたことは無かったんじゃない。父上ゾンビの特権なんじゃないか。そう思ったわい。

おっと、すまぬ。

食べ物の話はつい、長くなってしまうものじゃな。話を戻そう。

わしはその家先で父上様達のことを暫く観察しておったんじゃない。

観察しておると父上方は何やら水を注ぎ合っておった。日中にこの様な光景は見たことが無かったわ。そしてわしらはなぜこの父上方がゾンビと化してしまったのかを目撃したんじゃない。

暫くすると新たに父上御一行様が店の中へ入って行ったんじゃがその時はまだ正気じゃった。じゃがあの例の水を注ぎ合って暫くした後、徐々に変貌してきおったんじゃ。

わしと小次郎はその変わりゆく様を観察しておった。きっとあの注ぎ合つとる水に秘密があると確信したんじゃよ。どうやら飲む者によって違うらしいんじゃが、大体において上機嫌になる様じゃ。

わしらは暫くの間、愉快的気持ちでその光景を見とったわ。みな日中も、こう笑って過ごせれば良いんじゃがのう。わしらは食い物を有り難く頂戴して平らげた後、感謝の気持ちを伝えその場を去った。

道を歩いておると、今度の家の出入り口上には、何やら「守り神」がおった。これもまた見たことのないものじゃった。

しかも与っさんの家の壁に掛けられておるでかい魚とは違うて、何やら足がやたらと付いておった。蜘蛛にも似とったが、ちょっと違うようじゃ。



と、よく見ると二本の武器が備わっておるではないか。わしらの武器にもなる、便利な爪みたいな物じゃの。

この「守り神」、動いておるんじゃが動きが何だか奇妙じゃった。

実はわしら猫世界にも伝説の「守り神」様がおるといふ噂がある。わしも早く「守り神」様に会ってみたいものじゃった。

さて、「守り神」を通り越すと道端に不良猫ども五匹がたむろっておった。わしは取り敢えず母上のことを何か知らんか尋ねたんじゃが、知らんと言うのでそのまま通り過ぎようとしたんじゃ。

じゃが奴ら、わしらにイチャもんを付けてきおった。



何でもここは不良猫どものみ入れる神聖な場所で、もし入ろうものなら、ただでは済まんと言う。わしは大の猫がこの様なつまらん事を言いだすから、思わず笑ってしもうたんじゃ。

そしたらわしのことをその内の一匹がド突いてきおって、次の瞬間小次郎が跳び掛かったから一瞬にして喧嘩になってしもうた。



もう何が何だか分からんかったわ。

取り敢えずわしが一匹、小次郎が二匹に猫パンチを浴びせて、不良猫ども三匹を一気に追っ払ったんじゃ。

残るは不良猫どもの親玉とその参謀の猫一匹やった。

わしと小次郎で丁度一匹ずつ相手できると思うとったら、親玉が貴様らなかなかやるの言うてきて、わしらが奴らの言うこの神聖な場所へ以後も出入りして良いということになったんじゃ。

不良猫と言うても親玉猫になるような不良猫は、それなりに「道德心」ゆうものがあるのかも知れん。そうして、この親玉猫の話を知ると随分苦労してきたようじゃった。

何でもこの親玉猫の母上は病気にかかって早くに亡くなってしもうたそうじゃ。

父上も不良猫どもとの戦いに敗れてお亡くなりになったと言う。

以来というもの、兄弟の中でも争いが起こるようになり、遂にはバラバラになってしもうたらしいんじゃ。わしにはこの親玉猫の気持ちが痛い程分かったわ。誰も望んでこんなことをしているのでは無いのじゃよ。

この親玉猫、実は、ただ寂しいだけであつた。

別れ際に親玉猫が、猫世界の「守り神」様について教えてくれよった。

「守り神」様ならわしの母上のことも知っているかも知れぬと言うんじゃ。

親玉猫が言うには「守り神」様は何でも、色取り取りの食べ物が置いてある場所に居らっしゃるといふ噂らしい。

???

わしは最後に名は何と申すんじゃと尋ねたら、親玉猫が虎次郎で、参謀が与助という名前じゃと言った。わしはあの昔話に出てくる伝説の珍獣と同じ名前か、良い名前じゃのうと返事をして、わしは次郎こっちは小次郎じゃと名乗ってそれで別れた。

以後、虎次郎達とは二度と会うことが無かったわ・・・。

「三毛猫次郎の短い一日（2巻）」

おしまい